

映画『ワンダーランド北朝鮮』 (ユナイテッドピープル配給)

2018年6月30日(土) シアター・イメージフォーラムほか全国順次ロードショー！

北朝鮮の“普通”の暮らしとその人々。これはプロパガンダか？それとも現実か？



人々の幸せそうな表情に、自然エネルギーを活用した循環型な暮らし。

北朝鮮の予想外のリアル発見を発見するドキュメンタリー。

監督：チョ・ソンヒョン 配給：ユナイテッドピープル

2016年／109分／ドイツ・北朝鮮

オフィシャルサイト：<http://unitedpeople.jp/north/>

映画概要

世界から隔離された国、北朝鮮に良いイメージを持っている人は少数派だろう。北朝鮮のイメージは大概、独裁国家で、核開発を行う危ない国といったところだろう。しかし、それが本当に北朝鮮の姿なのだろうか？韓国出身のチョ・ソンヒョン監督は、この問いの答えを探しに北朝鮮で映画制作を行うため韓国国籍を放棄し、ドイツのパスポートで北朝鮮に入国。そして、エンジニア、兵士、農家、画家、工場労働者など“普通の人々”への取材を敢行した。

北朝鮮で制作する全ての映画は検閲を逃れられない。しかし、自由に取材活動が出来ない制約下でも“同胞”として受け入れられたチョ監督は、最高指導者への特別な感情を抱く普段着の表情の人々と交流し、意外と普通だが、予想外の北朝鮮の素顔を発見していく。

公務員画家の男性は、美しい女性を描くことを楽しみ、表情は明るい。デザイナーという言葉を知らない縫製工場で働く少女の夢は、“今までにない独創的な服を作る”こと。こんな“普通”の人々が登場する。また、経済制裁下にある北朝鮮の人々の暮らしぶりは慎ましいが、どこか懐かしさを感じさせる。経済制裁を受け、自活せざるを得ない必要性から、自然エネルギーを活用する人々の暮らしが循環型であることは驚くべき事実である。あなたの知らないもう一つの北朝鮮の姿が明らかになる。

本作についての問い合わせ先：配給会社ユナイテッドピープル pr@unitedpeople.jp 090-8833-6669

背景

“普通”の人々に出会うために、韓国出身女性監督チョ・ソンヒョンが、韓国人として本来行くことの出来ない北朝鮮に韓国国籍を放棄し、ドイツ国籍を得てドイツパスポートで入国し、韓国出身者として、初の北朝鮮政府公認ドキュメンタリー映画の制作を行った。韓国では、韓国政府の許可なく北朝鮮に行くとは裏切り行為としてみなされ、北朝鮮渡航後に韓国に戻ると投獄される恐れがある。そんなリスクを避けるために、ドイツのパスポートを使い、北朝鮮に入国したチョ監督は、“同胞”として受け入れられ、自由に取材行動が出来ない制限下で、人々の日常を捉えようとカメラを回していく。そして彼らが人生で何を望み、どんな夢を描いているのか聞いていく。撮影には周到な準備を行った。2012年から2014年の間に合計4回の事前取材を行い、実際の撮影は2014年9月の4週間と2015年4月に1週間だった。

カメラが映し出す驚くべき北朝鮮の姿の一面は、北朝鮮が閉鎖的で、諸外国から経済制裁を受けているという事情によって皮肉にも持続可能な循環型経済への移行が進んでいることだ。エネルギーの面では、チョ監督が訪れた平壤の真新しいプールは地熱の活用をしているし、田舎の農家では自宅のテレビや照明の電力を太陽光発電により供給している。そこで見えてくるのは、北朝鮮が長年のエネルギー不足を解消すべく自然エネルギーに力を注いでいる事実だ。2013年9月2日朝鮮中央通信は北朝鮮が再生可能エネルギー法を制定したと報道（※1）。AFP通信は「2014年末時点で、北朝鮮国民の約2%が太陽光パネルを入手した」と報じている（※2）。韓国の北朝鮮専門家、鄭昌鉉（チョン・チャンヒョン）氏は、「北朝鮮「2044年までに再生エネルギーで電力500万KWを生産」計画を立案」と、北朝鮮の最新の再生可能エネルギー計画を確認したとしている（※3）。このように、北朝鮮は太陽光、太陽熱、風力、地熱発電など自然エネルギーを推進しているのである。

暮らしの面でも物もお金も限られている必要性から循環型な暮らしが出現している。チョ監督が訪れた農家の家庭では、野菜クズを家畜に食べさせている。家畜の糞は肥料になるし、糞から発生するメタンガスは料理用のガスとしても活用されている。さらに、収穫の終わった後に出る藁は、煮炊きと暖を取るために使われている。経済制裁下の北朝鮮の田舎では、自然とこのような自給自足的な循環型の暮らしが実践されているのだ。

この映画が映し出すそんな普通の北朝鮮の人々の暮らしは、多くの人々が想像するステレオタイプなものとはまるで違うものだろう。

（※1） North Korea adopts renewable energy law

<http://www.nkeconwatch.com/2013/09/17/north-korea-adopts-renewable-energy-law/>

（※2） 北朝鮮で輝く中国製の太陽エネルギー利用機器 国境貿易で取引活発

<http://www.afpbb.com/articles/-/3140850>

（※3） 北朝鮮「2044年までに再生エネルギーで電力500万KWを生産」計画を立案

http://dprkanalysis.info/analyzing02/news/news_detail_72.html

映画『ワンダーランド北朝鮮』解説

イ・ヒャンジン (立教大学 教授)

あどけない軍人たちと白頭山の日の出で始まるチョ・ソンヒョン監督による北朝鮮の物語は、観客側もアクティブな見方をする必要がある。チョ監督は6回にわたる訪朝を通して、金正日誕生逸話を紹介する女性ガイド、金正恩時代の変化を象徴する平壤市内のムンスプール場の技術者とその家族、男性画家、農民夫婦、縫製工場の労働者、サッカー選手養成学校や幼稚園の子どもなど、各階層のモデルとなる労働者や子どもたちと出会う。一様に金正恩元首の恩恵を謳う彼らに、チョ監督は恋愛や結婚、夫や孫自慢、将来の夢、日常生活についてたずねる。

この作品は北朝鮮の政治体制については距離を保ち、問いながらも間接的に扱う。答えづらい質問を恥ずかしがるように笑ってごまかす登場人物たちの表情や、戸惑いのしぐさ、砂を掴んでは離す小さな手のなかで、物語は継続する。カメラは乱れない部屋に集まり食事をする家族、畑で汗を流す農民、行進曲に合わせて集団体操を行なう工場労働者、巨大な塔、参拝する多くの人々を背景に映している。また、インタビューとは異なり、固定された視線で撮ることが難しい街の人々をスローモーションで映したり、インタビューの間に叙情的な音楽にのせて美しい自然の風景をはさむことで深い余韻を残している。

チョ監督は撮影のため、インタビューの対象を職業、年齢、性別、家族関係、住んでいる地域に細かく分類した。彼らは各階層のモデルにふさわしく、自身が話すべき内容をよく分かっているようだった。しかし彼らのインタビューの中にも金正恩時代の変化は確かに感じられる。チョ監督は変化する北朝鮮の姿も同時にカメラに収めながら、彼らの政治的信念などとは距離を置くようになる。作中のナレーションはドイツ語で行なわれるが、ドイツ語は監督が韓国を去り異国の地で習得した言語であり、登場人物たちに対する愛情、分断民族のやるせなさ、そして平和を渴望する心の表れのように感じられる。

『ワンダーランド北朝鮮』は、女性監督による繊細な視線や親密さで、登場人物と北朝鮮当局の間に存在する複雑な視線を切り取っている。極秘取材によって隠された姿を暴露するという姿勢はそこにはない。外部者としての視線ではなく、自身の祖国の一部として、北朝鮮ではなく「北方の地」として、そこに暮らす人々の日常を語っている。この作品を見る私たちは今まで見たことのない北朝鮮に出会い、平和を模索するきっかけにすることができるのではないだろうか。

チョ・ソンヒョン監督について

チョ・ソンヒョン (Sung-Hyung Cho) は1966年韓国釜山市生まれの映画監督でドイツのザールブリュッケンの単科大学 HBKsaar 教授で映画制作を教えている。ソウルの延世大学でコミュニケーション論を学んだ後、美術史、メディア学、そして哲学を学ぶために1990年にドイツのフィリップ大学マールブルクに留学。卒業後、ドイツのテレビ局で編集の仕事に携わる傍ら、ミュージックビデオや短編ドキュメンタリー映画の制作を行う。FULL METAL VILLAGE



(2006)は処女作で、いくつもの映画賞を受賞している。その後、HOME FROM HOME (2009), 11 FRIENDS (2011), FAR EAST DEVOTION (2015)などを制作している。

チョ・ソンヒョン監督インタビュー

Q.なぜ『ワンダーランド北朝鮮』を制作することになったのですか？

謎めいた北朝鮮に興味がなかったわけではないですが、北朝鮮で映画を撮ることは、私だけではきっと思いつかなかったと思います。韓国人として生まれ育ちましたので、北朝鮮で映画を撮影する許可を得ることは不可能だと考えていましたし、北朝鮮の人々は顔が赤く角が生えている鬼だと教わりましたので、北朝鮮に対しての恐怖心もありました。しかし、ドイツのテレビ局からの提案で『ワンダーランド北朝鮮』を撮影するアイデアが生まれたのです。

Q. どんなアイデアだったのですか？

『ワンダーランド北朝鮮』で私が表現したかったのは北朝鮮の人々の日常です。世界から隔離された北朝鮮の一般的なイメージは、否定的なものばかりです。軍事パレード、ミサイル発射実験、飢餓や熱狂的に崇められる三世代の指導者達による独裁政治などです。私は、私自身の目で実際の北朝鮮を発見してみたかったですし、人々がどのような日々生活を送っているのか、なぜ彼らが私たちにとって異常な人々として映るのかを知りたかったのです。結局、彼らも韓国人と長い歴史と伝統を共有しているコリアンです。私は、ドイツ国籍の韓国出身女性として、可能であれば両国の和解と統一に貢献したいと考えています。

Q.撮影準備や撮影許可を得るにはどれほどの時間がかかりましたか？

まず、北朝鮮に入学出来るようになるためだけでも、韓国籍を放棄し、ドイツ国籍を得なければなりません。これには9ヶ月もの時間がかかりました。これは北朝鮮のためだけでなく、韓国のためにも必要な行為でした。もし韓国人が韓国政府からの許可なしで北朝鮮に渡航したら、韓国に再入国次第逮捕される恐れがあるからです。というのも北朝鮮への渡航は韓国にとって裏切り行為と考えられるため、懲罰の対象となります。韓国と北朝鮮の間では、未だに冷戦や鉄のカーテンが存在するのです。

次のステップでは、北朝鮮についての新しい視点をもたらすために、可能な限り沢山の取材対象候補者のリスト作りをしました。異なる職業、居住地、年齢の人々でした。その中から一部を実際に取材しました。

Q.韓国籍の放棄はどう思っていますか？

最初はとても不思議な感じがしました。同時に悲しくもなりました。しかし、映画のためにしなければならなかったことでした。しばらくしてドイツ国籍となり、ドイツのパスポートが得られたことに心が弾みました。同時に、韓国と北朝鮮の両方が私の祖国になりました。

Q.ドイツの市民権を持っていても、北朝鮮の役人たちはあなたが韓国出身であることを知っていましたよね。滞在中、その点で厳しい監視下に置かれたなど感じることはありましたか？

最初のコンタクトは、ドイツ側のプロデューサーと北朝鮮側のプロデューサー同士で行われましたが、私の素性は最初から秘密ではありませんでした。しかし、それが問題になることはありませんでした。撮影許可を得た後、私たちはルールに忠実でしたし、そもそも北朝鮮の人々は、外国人ゲストを粗末に扱うことはなく、むしろ歓迎的であることを知っていました。しかし、取材対象者たちが私の素性を知って、どう反応するかについては心配がありました。実際に北朝鮮の人々に会ってみると、皆、私を受け入れてくれたことにほっとしましたし、嬉しく思いました。

Q.撮影準備はどのように進めたのですか？

取材対象と撮影場所を選ぶために、私たちは撮影開始前に4回北朝鮮を訪れました。他の映画制作者はそのような努力をしていませんでした。ほとんどの場合、初めて国を訪れ、すぐに撮影を開始しているのです。2回目の訪問以後、新しいものが見えてきます。

Q.撮影はいかがでしたか？

隠し撮りしないことは最初から決めていました。韓国出身者として私が何をして、どう行動するかについて北朝鮮側が特に注意深く、そして慎重に私のことを監視するだろうことは分かっていたからです。韓国からのスパイだとは思われたくありませんでした。疑われる行為をすれば、北朝鮮、韓国、そしてドイツとの間の深刻な外交問題に発展してしまうからです。そのような問題は、過去に起こっています。例えば、観光客を装った米国人ジャーナリストが北朝鮮で逮捕され、元大統領のジミー・カーター氏のタフな交渉でやっと出国することができた事件です。

Q.思い通りに撮影は出来ましたか？

一番困難だったことは何が真実かを見極めることでした。私たちの北朝鮮を見る目線はある意味最初から偏っていますが、出会った北朝鮮の人々の話をどこまで信じていいのか迷いが生じます。それでもなんとか全体主義的でイデオロギーに満ちた国家に生きる人々の本音の姿を発見しようと思いました。しかし、これは非常に難しいことでした。なぜなら彼らは本音を見せないことに慣れてしまっているからです。北朝鮮を訪問した人は皆、北朝鮮での体験がどこからどこまでが真実なのか判断に困ると思います。

もう一つ、非常に難しかった点は、撮影時以外の時も北朝鮮担当者の同行なしには買い物にさえ行けなかったという点です。北朝鮮のローカルパートナーが、常に私たちの影のように存在していたんです。最初の撮影の四週間後にはもう耐えきれないという思いがして、北朝鮮を去る潮時だと思いました。

Q.もっとも印象的な出来事は何でしたか？

北朝鮮で思い出したのは、私の子供時代です。現在の北朝鮮は、韓国の1970年代のようで、その時代に戻ったかのような感覚になったのです。その頃の韓国は、現在のように資本主義経済が行き過ぎてはいませんでしたし、人々はもっと純真で人間的だったのです。



コメント

監督はドイツ国籍を取得、北朝鮮に入国したが、撮影に当たって常時、監視の目が光っていたという。そんな状況を頭に入れてこの映像を見ていくと一見、平和的な、平穏な日常に見える映像が妙にスリリングに感じられてくる。観る者の映像を読み解く能力が試されている。

— 原一男（映画監督）

北朝鮮は外から見たのではわからないことがたくさんある。私自身一度訪れてまたわからなくなっている面もある。事実の一端を切り取っている本作で北朝鮮を体験してほしい。

— 池内ひろ美（家族問題評論家）

初海外旅行で北朝鮮に行った時のことを思い出した。システムに驚愕し、素朴な人々の姿に懐かしさを抱く。偏見をとっばらって、まっさらな目で観てほしい。

— 雨宮処凛（作家・活動家）